● 研究ノート

幼児の笑いを考える――笑いの攻撃性の観点から

伊藤理絵（福島県立医科大学 医学部神経精神医学講座心理士）

要約

幼児の笑いについて、攻撃としての笑いが見られたエピソードを通して検討した。幼児が見せる笑いの多くは親和的な笑いであり、攻撃を意図した笑いはほとんど見られない。しかし、見えにくい攻撃的笑いを見過ごすことで、幼児の言動を適切に解釈できない問題につながることについて考察した。従来、幼児の笑いについては、悪意のない笑いとして捉える傾向が強かった。親和的笑いも攻撃的笑いも、同じ“笑い”という表出行動ではあるが、その解釈において、幼児の笑いのすべてが親和的、もしくは悪意のないからかい行動であるとみなしていては、笑い手と受け手の間に生じる認識のズレを適切に把握できない場合がある。特に、幼児を取り巻く大人が子ども同士の笑いの認識のズレに気づかないままでいると、いじめ行動を助長することにもつながりかねない。よって、幼児の笑いから幼児の言動を適切に解釈するためには、親和性と攻撃性という笑いの両面性を踏まえたアプローチが必要であることが示唆された。

キーワード：幼児，笑い，攻撃性，保育

1. はじめに

笑いは、「おもしろい」「おかしい」といった心的現象が行為となって表れたものである。笑いの表情は、喜びや幸福を表すものであるため（Darwin, C, 1872）、ノンバーバル・コミュニケーションの手段として笑いを用いることで、互いを近づけやすくさせ、温かく受け入れるサインを示すことができ、他者の心を和ませることができる（工藤 , 1999）。

一方、笑いがいつも他者に対する親和性を表すとは限らない。コミュニケーションにおける笑いについて、井上（1984）は、雰囲気を明るくし、人間関係を円滑につないでいこうとする「協調としての笑い」だけでなく、笑った方が優越感に浸り笑われた方が惨めな思いをする「攻撃としての笑い」という二つのタイプを呈示している。

幼児期の笑いを分析した友定（1993, 1999a）によると、乳児期に親しい大人から笑顔を向けられてきた子どもは、幼児期初期においても大人から受容される体験を重ねていくことで、やがて子ども同士での交流ができるようになっていく。そして、3歳児になると集団の規範からのずれを理解し、笑われることを気にし始め、4歳児になると自分より劣ったものを笑う、嘲笑といった攻撃的意味を持ち合わせた笑いも見せるようになる。つまり、幼児期の子どもは、他者との社会的な交流を通して笑いに潜む攻撃性を認識し、笑いに共存する相反する二つの性質を経験とともに学習していくのである。

幼児が笑いの攻撃性に気づくようになる認知発達過程においては、子ども同士のやり取りの中で、笑い手と受け手に認識のズレが発生し、コミュニケーションが適切に機能しない事態が生じる場合がある。例えば、筆者は2003年に保育所で行った観察において、次のようなエピソードを記録している。

〔エピソード〕

給食準備中、A男（6歳3ヶ月）が、運んでいたスープをこぼしてしまう。それを見てB子（6歳3ヶ月）はA男に笑顔を向け、ニコニコしてぴょんぴょん跳んではしゃぎ出す。A男が担任に「雑巾で拭いてー。」と言われ持ってくると、B子は、アハハハと声を出して笑う。A男が「なんで笑うのー？」と言うと、B子はにっこり笑う。するとA男は強い口調で「なんで笑うのー！？」と言う。A男の声を聞いたC子（6歳3ヶ月）がB子に「笑ってないよね。」とフォローすると、B子はC子をじっと見てから席に着き、C子と話をする。A男はボロボロ泣き出す。気づいたB子が「なんで泣いてるの？」と尋ねるが、A男は答えない。その後、担任に泣いている理由を聞かれたA男は「B子ちゃんが笑ったから。」と言うが、B子はA男ではなくC子を見て笑ったのだと言う。

このエピソードにおいて、A男が泣いてしまったことは、B子にとって思いがけない反応であり、B子が戸惑っている様子が窺える。この2週間前、B子が友人に「けんかじゃないよね、笑ってるもんねー。」と発言した記録があることから、B子は笑いの親和性を理解しているといえる。B子にとってけんかを表すはずがない笑いにより、A男は泣いてしまった。親和性の笑いを行ったB子とそれを親和性だと受け取れなかったA男の間には、認識のズレが生じており、A男の泣いた理由は理解されずに終わってしまってい

る。ここに、教育・保育に関わる大人の対応の重要性が示されていると思われる。

従来、幼児の笑いには悪意は存在せず、むしろ親しくなりたいという気持ちの表れであるといわれたり（平井・山田 , 1989）、幼児の発する笑いには攻撃的笑いが見事といっていいほどない（原坂 , 1997）と報告されることがあった。子どもたちの持つ力を信じて教育・保育をすることは大切であるが、大人は、子どものもつネガティブな姿を含めた上で、子どもの行動を適切に捉え、その中にポジティブな芽を見る視力をもつことが必要である（友定 , 1999b）。幼児を取り囲む大人が、子ども同士の笑いの認識のズレに気づかないままでいると、いじめにつながる行動を助長することにもなりかねない。なぜなら、いじめは、被害者の受け止め方とそれ以外の者による事態の認識の仕方にズレが生じることが多いため、「見えにくい」といわれており（森田･清水 , 1994）、幼児期における笑いもまた、ほとんどが親和的笑いであるために、攻撃的笑いは「見えにくい」のである（伊藤他 , 2009）。

発達研究においては、恥や罪悪感といったネガティブな感情だけでなく、笑いやユーモアなどのポジティブな感情の発達を理解することが必要である（氏家 , 2010）。しかし、幼児の笑いをポジティブな感情の側面から捉えると同時に、攻撃性という側面からも理解することが、子どもの姿を適切に解釈するためには意義のあることだと思われる。よって本研究では、幼児の笑いの観察記録を攻撃性の観点から検討し、幼児の笑いを親和性と攻撃性の両面から捉えることの必要性について考察する。

2. 方法

2004 年 12 月～ 2005 年 3 月の間の計 9 回、N 保育所にて幼児の一日の生活（8 時 30 分～ 15 時 30 分）で見られる笑いを観察した。4 歳 0 ヶ月～ 6 歳 11 ヶ月の幼児 45 名（男児 16 名・女児 29 名）を対象に、記録用紙を使用した直接観察による記録（計 6 回）とビデオによる記録（計 3 回）をとった。幼児に話しかけられた時と幼児が危険に直面した時にだけ介入する立場を基本とし、日常の保育の中で生じる笑いを記録することに努めた。

笑いが生起する文脈について理解するため、一定時間（15 ～ 20 分）観察標的児 1 名を定め、表情が見える位置（約 1 ～ 3 m の範囲内）に立って観察し、一定時間が経過したら次の標的児に移ることを基本とした。笑いのエピソードが終了しない場合は、終了するまで観察を行った。エピソードの終了は、笑いを行っていた当事者が笑いに伴う行動を止めた場合とした。記録する際は、時間軸に沿って、笑いが起こった文脈、相手の反応や周囲の反応、それを受けた笑い手のその後の行動を具体的に記録した。記録したデータはその日のうちに、ビデオによる記録のデータは次の日までにフィールドノートにまとめた。

笑いの表情について、直接観察に入る前に、ビデオの記録の一部（15 分間）を観察者を含む 2 名が独立に判定した。笑いは、口角が後方または上方へ引き、上唇が引き上げられ下眼輪筋が収縮する表情であるが（Darwin,C,1872）、顔に表れている時間は 0.6 ～ 4.0 秒の間の短い時間であるため（工藤 ,1999）、一瞬だけ見せる微笑を笑いの表情とは見なしにくかった。よって、口角が上がり、それに伴って目元が細くなる表情がはっきりと表れた場合を笑いの表情とすることにした。また、声を伴う笑いは、声のみで笑いを表現することもあるため、笑い声（アハハ、キャハハ、フフフ、ヒヒヒなど）が表れた際の表情や状況を具体的に記述することにした。

笑いの事例数は、笑いの発生から停止・消失までを行為者につき 1 事例とした。同じエピソードの中で、直前に行った笑いとは異なる相手や、同一の相手に対してでも異なる性質の笑いが見られた場合は、それぞれにつき 1 事例とした。笑いの事例数について、観察者を含む 2 名が独立に評定したところ 99.2％一致した。不一致のあった事例は、協議した上で決定した。

3. 結果

観察された笑いは 1518 事例、そのうち攻撃としての笑いは 0.86％（13 事例）であった。

攻撃としての笑いが見られた 13 事例は、無視等の間接的な攻撃行動に伴う笑いが 8 事例（エピソード 1 ～ 2）、同意のない戦いごっこで勝者が見せた笑いが 3 事例、他者の失敗を笑いだけで非難した事例が 1 事例（エピソード 3）、自分の攻撃行動を正当化するため威圧的な言動とともに見せた笑いが 1 事例であった。

〔エピソード 1〕
無視に伴う笑い

A 子（6 歳 0 ヶ月）が、M 子（6 歳 8 ヶ月）の所へ「まぜて。」とやって来る。すると、M 子は、A 子ではなく、Y 子（4 歳 0 ヶ月）に向かって「Y 子ちゃーん。」と笑って呼びかけ、A 子から離れていく。A 子は、その場に立ち尽くす。

〔エピソード 2〕
集団での無視に伴う笑い

給食の時間、A 子（6 歳 2 ヶ月）、C 子（6 歳 7 ヶ月）、E 子（6 歳 2 ヶ月）、N 子（6 歳 9 ヶ月）、S 子（6 歳 7 ヶ月）の女児 5 人と、K 男（6 歳 2 ヶ月）が同じテーブルで食べていると、C 子が、K 男に真似されて嫌だと言い始める。それを受けて、A 子、E 子、N 子、S 子も、

K男はいつもC子の真似をしていると言い出し、5人の女児たちはK男と話をしないことに決める。K男は構わずに女児たちに話しかけるが、誰もK男の言葉に耳を貸さず、無視し続ける。それでも、K男は女児たちに話しかけ続ける。S子は、K男と話をしないよう周りに促すと、K男からフンッと顔を背け、隣に座っているN子に「K男君のお母さんの名前、○○子、○っちゃん。」と言い、2人でゲラゲラ声を上げて笑い合う。それを聞いて、K男は下を向く。
(観察期間中、N子とS子が、K男と自発的に遊ぶ様子は見られなかった。N子とS子は、自由遊びの時間はいつも一緒に遊んでおり、普段から仲良し関係にある。)

〔エピソード3〕
他者の失敗を笑う（R子がS子に向けた笑い）

H子(5歳8ヶ月)、R子(5歳11ヶ月)、S子(6歳6ヶ月)が羽根つきをしている。R子が羽根を高く上げ、羽子板で打とうとするが、空振りが続く。6回目の空振りでR子が声を上げて笑うと、R子と目が合ったS子も笑い返す。R子は、再び羽根を高く上げて打とうとするが、また空振り。8回目の空振りで、それまでにこにこ笑いながら見ていたH子が「貸して。」と手を差し出すが、R子は羽根を渡さない。R子は、またチャレンジするが、やはり空振り。S子は、だんだん苛立ち始め「はやくー。」と急かすが、R子はまた空振り。すると、S子は「投げないでよ、だから。」と言い、H子は落ちた羽根を拾う。H子が構えるとS子は笑顔になり、H子が突いた羽根をにこにこ笑いながら追いかけていく。R子は羽根の動きをじっと目で追いながら、羽子板で自分の頭を叩いている。羽根を拾ったS子は、R子の真似をして羽根を上に投げ、羽子板で打とうとするが、S子も空振ってしまい、羽根が床に落ちる。それを見たR子はS子に向かって、「ハハハハ！」と声を上げて笑う。笑われたS子は、落ちた羽根を拾うと羽子板で外を指し、「あー吹雪ーー!!」と叫ぶ。
(S子は、このエピソードの前にも窓から外を見て「吹雪ー！」と騒いでおり、外が吹雪であることは知っていた。)

4. 考察

観察された笑いの事例数（1518事例）における攻撃としての笑いの事例数(13事例)は、1%にも満たなかった。また、他者を無視する中で見せる笑いが多いことから、幼児の攻撃としての笑いを発見するのは難しいといえる。従来、幼児の笑いは親和性の面から強調する傾向がみられたが、それは、幼児の攻撃としての笑いの発見のしにくさにあったと思われる。確かに、幼児の笑いの多くは他者に対する親しみを表すものであり、笑いが少ない幼児も他者との親和的関係のもとでよく笑う（伊藤他, 2007)。しかし、観察された攻撃としての笑いは、攻撃行動を強化するように笑いが機能していた。

笑いの起源は愉楽的なものだと考えられている（松阪, 2008)。エピソード1および2は、他者を無視する場面で生じた笑いであるが、笑いが本来、楽しさを表す機能をもっているだけに、その場にいても笑いを向けられないことは、一緒にいても楽しさを共有できないことを表しており、笑いを向けられない者にとっての疎外感は、強い精神的苦痛にもなりかねない。エピソード2のように、集団から無視された状況では尚更である。

エピソード2では、集団でK男1人を無視する状況の中で、S子がK男の母親の名前をからかい、N子と笑い合う。年長児では、特定の仲良し友だちを持つようになる幼児が見られるが、そのような幼児の中には、一緒に遊んだり活動したりするという実際の相互作用以上の心理的な結びつきを示す友だち関係も確認される反面、集団のウチとソトを明確に区別し、仲間以外の者に対して排他的になる集団も出てくる（青井,1998)。S子とN子の笑いは、仲間としての心理的な結びつきが弱いK男に対する排他的な笑いであり、エピソード1に見られる笑いよりも攻撃性の高い笑いであると推測される。

幼児が笑いの攻撃性を認識するようになると、自分の失敗を笑われることに苦痛を感じるようにもなる。エピソード3において、R子は空振りが続く自分に不快感を示したS子自身もR子と同じように失敗したのを見て、S子に向かって声を上げて笑う。S子はR子の笑いによる非難を避けるように、外の景色へ話題を逸らしている。笑いの二面性について理解した幼児は、笑いを攻撃として用いるようになり、笑われた側もそれが「恥ずかしい」ことだと認識するようになると考えられる。

集団教育場面では、逸脱行動をとる子どもに対して、子ども自身で自分の行動を点検し、逸脱しているか・いないかの行動調整ができるよう、子どもに自ら気づかせる方法をとる（結城, 1998)。「他者から笑われる行動は、恥ずかしい」と示すことで、幼児の逸脱行動を規制する方法もその一つであると思われる。観察期間中も、保育士が「笑うところではありません。」と注意する場面や、女児（6歳8ヶ月）が「笑いごとじゃないよ！」と言って、他の幼児の行動を非難する場面が見られた。幼児は、「笑いが適さない場面がある」という教育を大人から受けており、それがコミュニケーションにおける笑いの使い分けに影響を与えていると推察される。

しかしながら、そのような恥の感情を喚起する笑いを受ける側の辛さは、子どもには重すぎるときがある

（友定 , 1993）。はじめに示したエピソードでは、誤ってスープをこぼしてしまったＡ男に対し、Ｂ子がＡ男を傷つけるために笑ったわけではなかったとしても、Ａ男にとって自分の失敗を笑われたことは悲しいことであった。近年、「人から笑われることへの恐れ（“The fear being laughed at”）」に注目する動きがある（豊田・濱川 , 2008；野村他 , 2010）。大人は、幼児の仲間関係を把握する際に、笑いが多いと関係が良好であると解釈しがちだが、そのことにより、笑いの攻撃性に傷つく幼児を見逃し、見過ごされた幼児が誰にも気づかれないまま、その後、笑われ恐怖症に至る危険性が示唆される。エピソード３のような場面や、合意のない戦いごっこに伴う笑いが見られる場面は、一見、仲間同士で楽しく遊んでいるように思われるため、笑う側と笑われる側の認識のズレが見過ごされやすいと考えられる。

観察されたエピソードにおいて、攻撃を意図した幼児の笑いは５歳後半になってから出現するものであり、その頻度は 1518 事例中 13 事例（0.86％）という稀な事例であった。しかし、幼児期においてすでに、いじめの３つの要素（加害者の複数性、攻撃・拒否的行動の継続性、被害者の精神的苦痛）を満たす行動が見られると報告されている（畠山・山崎 , 2003）。幼児の笑いにおいて、攻撃としての笑いが見られることは少ないとしても、その頻度よりも、笑いが発生したエピソードや仲間関係の背景にも目を向け、解釈することが重要である。例えば、観察期間中、特定の男児に対する気になる笑いに気づいた先生方が、いじめの可能性を考慮し、保育所全体でその問題について話し合い、対応したことがあった。先生方が、笑われる側になりやすい男児の言動を肯定する声掛けを意識的に行うことで、他者からの攻撃的行動を受けるだけだった男児が、攻撃してくる相手に自己主張するようになり、その場面を見た他の幼児が男児を援護する場面も見られた。幼児期におけるいじめの早期発見に必要なことは、保育者が幼児の発する微妙なサインに敏感になることである（畠山・山崎 , 2003）。幼児の笑いの親和性だけでなく、発生頻度が少ない攻撃的な笑いにも敏感になることが、幼児の発するサインに気づく一つの手段になると思われる。幼児に関わる大人が、幼児の笑いを両面性から捉えることの重要性が示唆される。

5. おわりに

幼児の笑いを攻撃性の観点から検討してきた。笑いを理解するためには、笑いに対する親和性、攻撃性、その両面から感じられる思いを共有することが大切であると思われる。幼児の笑いの両面性を理解することが、幼児の言動を適切に解釈する一つの手段になり、幼児期に起こるいじめや笑われ恐怖症の発症を防ぐことにも繋がるのではないだろうか。したがって、幼児の笑いを適切に理解するためには、学際的な視点から総合的に笑いを捉えることが必要であり、今後、子どもの人間科学である「子ども学（child science）」からのアプローチが期待されよう。

謝辞

ご協力くださった保育士の先生方、子どもたちに心より感謝申し上げます。

〈参考文献〉

青井倫子（1998）．幼児の仲間関係．萩原元昭（編著）．幼児教育の社会学．41 － 58．東京：放送大学教育振興会．

Darwin,C（1872）．The Expression of the Emotions in Man and Animals．New York：Appelton．（濱中濱太郎（訳）（1931）．人及び動物の表情について．東京：岩波書店．）

原坂一郎（1997）．幼児と笑い．笑い学研究，4，4 － 10．

畠山美穂・山崎晃（2003）．幼児の攻撃・拒否的行動と保育者の対応に関する研究：参与観察を通して得られたいじめの実態．発達心理学研究，14⑶，284 － 293．

平井信義・山田まり子（1989）．子どものユーモア　おどけ・ふざけの心理．大阪：創元社．

井上宏（1984）．笑いの人間関係．東京：講談社．

伊藤理絵・本多薫・佐竹真次（2007）．幼児に見られる笑いの分類学的研究．笑い学研究，14，40 － 50．

伊藤理絵・内藤俊史・本多薫（2009）．幼児に見られる攻撃的笑いについて －観察記録からの検討－．笑い学研究，16，114 － 118．

工藤力（1999）．しぐさと表情の心理分析．東京：福村出版．

松阪崇久（2008）．笑いの起源と進化．心理学評論，51⑶，431 － 446．

森田洋司・清永賢二（1994）．いじめ－教室の病－（新訂版）．東京：金子書房．

野村亮太・尾之上高哉・丸野俊一（2010）．小学生版Ｊ － GELOPH<6>の構成と信頼性・妥当性の検討．笑い学研究，17，26 － 34．

友定啓子（1993）．幼児の笑いと発達．東京：勁草書房．

友定啓子（1999a）．参加観察法による幼児期後期の笑いの発達研究　平成７年度～９年度科学研究費補助金（基盤研究⒞⑵）研究成果報告書．

友定啓子（1999b）．保育現場からの現代幼児論⑵ 幼児の攻撃性．幼児の教育，98⑹，48 － 55．

豊田広司・濱川智子（2008）．日本版 Gelotophobia 尺度（Ｊ － GELOPH）の作成．奈良教育大学紀要，57⑴（人文・社会），59 － 64．

氏家達夫（2010）．発達研究が捉える感情は生ぬるくなってしまったのか？－久保氏，森野氏，坂上氏の論文に対するコメント－．心理学評論，53(1)，56 － 61．

結城恵（1998）．幼稚園で子どもはどう育つか－集団教育のエスノグラフィ．東京：有信堂高文社．